

## とにかく「省エネ」なんです

語り手 戸簾隼人(高校八期生 データサイエンティスト)

聞き手 中北啓

\*

原点は中国から

―まずそもそも、立命館守山高校に入ろうと思ったきっかけとかはあるんですか？

私、出身が野洲ですが、中学校では、中国の上海日本人学校に通っていたので、中国から受験する必要があったんですよ。なので、そもそも日本に帰ってくるときに公立高校の入試が受けられなかったんですよ。時期的な問題で、で、私立受けるっていうのと、上海は東京から来ている人が多かったんで、そもそも「私立に行くのが普通」という認識で、全員私立行くという前提でなったときに、どこを受けようかなと思って、確かに、関西では立命館宇治高校(立宇治)と立命館守山高校(立守)を受けたんですよ。

―はい。

立命館宇治は、中国現地で受けられる入試があったので、とりあえず受けてみようという気持ちでした。合格を頂いたものの、通うためには交通費がかかったり、電車通学で時間がかかったりと、大変なイメージが強かったことを覚えています。そこで「立宇治受かったし、せっかくやから、同じ立命でも、家からチャリで通える立守受けるか」となって、立守に入学しました。割と適当な感じ。他の人とは違うかも知れない。―確かにそうですね。

当時の私にとっては「立守がいいってよりかは、選択肢的に一番家から近い私立」っていうところでいったら立守だったということですね。

―休みの日とかはお友達の方と遊びに行くとかってしていたんですか？休み何してたんやろ俺。ずっと、パソコン作ったりとか、機械作ったりしてるのか。特に何かに打ち込んでいるってわけではなさそう。でも多分、昔も今もずっと私はパソコンとか触ってた人間なんで、何かプログラム作ってたんじゃないかな。けど全然確証がない。上海にいたときは友人にプログラムを配ったりしていましたが、高校の当時は、何もプログラムをリリースしてないから。それぐらい何もしてない。

―そのプログラミングというのはいつ頃から興味を持ったのかみたいな、やろかなみたいになったのですか？

中国に、今はなくなっちゃいましたが、ジャンク職人みたいなのが集まる場所(上海・宝山路駅周辺)があって、どう見てもゴミみたいなモノを使って、商売をしているやばいおっちゃんたちがいるんですよ。いろんな国から仕入れてきた故障したPCとかプリンターとかケーブルとか。そのおっちゃん仲間になってプログラミングを教えてもらって、そこからプログラミングを勉強して、できるようになったんだけど、その流れかな。

―すごいですね、そのきっかけというか。

全部中国のおかげやね。

―高校入学した当初でもいいんですけど、そのときに何か将来、こういうのになりたいみたいな夢がありました？

それはあって、中国の川とか見たらすぐ分かるけど、めっちゃ水汚かったんですよ。もう当時はPM2.5っていう大気物質で、汚染が大変で、外でたらずぐ喉や肺に影響がでしてしまう状況でした。なんか日本もそうやって欲しくないなと思ってて。環境とかが良くなるような技術とか、そう

いうことを開発する研究者になりたいなって思いがあつて、そういうことをやろうみたいな思いはあつたかもしれない。

—すごいですね。意識がすごいっすね。

いや、意識つてよりも、中国でそのままにいると危ないっていう現実を知っちゃったというだけなんで。

—体験も結構強いつてことなんですね。

そうですね。滋賀県出身なんで、やっぱり周りに水の環境があつたところから、ドブみたいな川で泳いでいるおっちゃんたちを見て、ちよつとこれは俺には無理だなと思つて。

＊

省エネから学んだリーダーシップ

—高校時代に楽しかったことつてなんですか？

意外と生徒会活動かな。なんかかんで一番ちゃんと時間使っていた気がしますもん。私は超消極的な理由で生徒会始めましたけど。

—きつかけ知りたいです。

きつかけは「絶対部活したくなかつた」からなんですよ。当時は全入部制だったんで。絶対に一個は入らないといけないつてなつた時、運動部は行きたくないと。ただ文化部に行くと、多分当時の私の考えだけど、せつかく高校に入ったのに陰キヤミたいないじりされるんじゃないかと。これはちよつとどちらも課題がある選択肢だと。じゃあ、残された選択肢はなにかと探したところ、生徒会だったら例外的に部活動つて扱いで行かなくていいっていう感じだったので。で入って、俺はプログラミングをやつてたんで。「生徒会ホームページを書くだけでいいから」っていう口車に乗せられて。当時は、「マジか！　つて。プログラム書いて部活動免除され

るならそれはいいや」と思つて始めて、始めたらまさかトントン拍子で副部長になつて副会長になつて、何でこんなことになつたんやつていう。

—ですよ。すごいめっちゃめっちゃ役職を持つてはるつていうのを拝見して。

全然です。当時は口車に乗せられた結果こうなつちやつたという感じでした。絶対何もしたくないつていう鉄の意志で入つたのにも関わらず、高校生活の大部分が生徒会になつちやつた。

—副会長になつて。実際にやつたことは、どういう感じなんですか？

なんか生徒総会みたいなのがあるじゃないですか。俺あれが大嫌いだつたんで、「あの時間勉強に充てた方がいいからやめましょう」つていうのを言つたら怒られました(笑)。最後まで抵抗し続けましたけども、実現しなかつたです。「茶番だからもう文章に書いて起こして投げたらいいのではないか」つて言つたら、「いやそういうわけじゃない」つて言われて、ずつとそれを戦つていました。なので、私も少し関わっています。今の生徒会が使っているLiquidus社の市民参加型意思形成プラットフォーム「Liquid」を使い始めていることなどは、ある意味、私の当時考えていたことが、時を超えて実現している気もして、少し嬉しいです。

—なるほど。

最初に考えることは省エネなんです。

—体育祭実行委員長もやつてたじゃないですか。それはどっちが先ですか？

あれは執行部の副部長になつたから、体育祭か文化祭のどっちかの実行委員長をやらなあかんかつた。

—副部長が兼任というか。

そう。当時はそうやって、やりたくないけど、「文化祭はかなり大変」  
っていうのを俺は知ってたから。あとは、私は絶対運動したくなかったん  
ですよ。体育祭の実行委員長になったら俺は絶対に競技でなくていいか  
ら。もう競技でないために「俺は体育祭をやる」って言ったけどあれは悪  
手でしたね。思ったより大変。

―特に体育祭でこういうことをしようっていうのはなく、やるしかないか  
らみたいな？

いやありましたよ。体育祭はもつと緩くやるべきっていう。「ちよつと  
体育が嫌な人でも、もうちよつと楽しめた方がいいんじゃない」って言っ  
て。練習とかくそだるいじゃんっていうの言い続けた結果、怒られたっ  
ていう。

―結局怒られた。

結局怒られた。それは先生じゃなくて、生徒たちに怒られたけど。みん  
ないろいろやりたいなと思って、俺はもつとゆるくていい、という感じで  
した。他人と自分との間での考え方の違いをよくよく理解できた日々を感  
じた機会でした。今思えば、立守時代はいかにゆるく生きるかみたいなこ  
とを考えていました。

―体育祭実行委員長として、当日体育祭見て、思ったことありましたか？  
結構求められてる答えは絶対しない気がする（笑）。

―全然大丈夫です（笑）。

やっと終わった！って感じですよ。

―なんか、やっててよかったなみたいなのはありますか？

それはないっすよ、もちろん（笑）。やっと、やっと仕事終わったっ  
て。これで体育祭終わって思った。

―なるほど（笑）。

一つのタスクをこなしていくっていうのはね、今の私にも通ずることで  
すけど、仕事のこなし方としてはすごく今も似てるんです。

―そうなんですか？

今コンサルタントとして勤務している分、タスク意識はすごく明確にあ  
ります。一個の仕事を終えたら、もうその仕事は考えないと、やることを  
構造化していく感じなんです。だから結局、その当時からコンサルっぽ  
い働き方というか、考え方で生徒会活動をしてたんだなと。

―考え方がそのまま今の仕事にも通ずると。

そうですね。

―生徒会活動で学んだこと。リーダーシップであつたりとかスケジュール  
管理っていうのを挙げてくださったと思うんですけど。その具体的なエ  
ピソードを教えてくださいたいです。

リーダーシップでいうとそれこそ体育祭とかじゃないすかね。生徒の  
方々には、私の本音は言わないわけですよ、そういうところではさすがに。  
本音を言ってしまうと面倒くさくなってしまうことは目に見えているの  
で。そのような中で、いかにして彼らの主義主張をベースとしたと仮定を  
しつつ、何か自分のやりたい方向に持っていくかみたいなことを、知らず  
知らずに考えていたと思います。ある意味、リーダーシップをどう発揮す  
るかみたいなのをいろいろ考えてたな。なので、なんかうまくいかないこ  
きは、結構悔しいって感じで割と感情はある程度出して。そういうのをな  
んかうまく使おうとか、人がどうやったら動くのかみたいなのをちよつと  
意識して、その人向けの対応をするみたいなのは頑張っていました。

―なんかすごい深いっすね。全然そこまで考えられない。そしてスケジュー  
ル管理。僕も文化祭実行委員長をやらしてもらって、スケジュールは全然

僕もできなくて。気づいたら月日とかも経ってたりして……。そういう感じですかね。

スケジュール管理はそうですね、あと提出物出さないとか、これまでにやっとかなきゃいけないことをやってない人が多いみたいなのが多かった。いわゆるマネジメントですね。他の人がどうやったら遅れを取り戻せるかみたいなものを考えることは、当時割と大変だったかな。よく高校生のときにやっていたなと思うぐらいはやってた。

確かにそうですね。生徒会のやることは結構レベルが高いという感じですかね。授業の中で、楽しかったなとかあるんですか？

面白かったのはあれかな。物理の授業で倉本先生当時担任が、「覚えなくていいから」って言って、物理の公式を全部とりあえず微分で出してみようみたいな話を話し出して。「一個の式を覚えたらあとは微分と積分だけで公式が導けるからなんも考えなくていいよ」って言われて、それを真に受けて、大学までやり続けていました。そういう逆張りのことをやってるのが楽しかった。周りの生徒は「覚えた方が楽」って言っていたけど、私は微分してやるって方法を学んだんだ。

―国語の林先生の授業は？

林先生も楽しかった。

―文献調査とかについて学んだみたい。それってどんな授業内容だったんですか？

林先生は特殊で、一つの教材について教えるんじゃなくて「全部お前らが調べてこい」みたいなことを言われ、調べた内容について発表したら、毎回批判されるっていう授業なんです。林先生が言っていることに反駁とかしてたら、点数がもらえるっていう謎の先生だったんで。ちょっと面白いなと思って、私は割とその先生のスタイル好きだったからやってたんです。

けど。普通の生徒には苦手意識があったと思っています（笑）。シンプルに言うことをやってれば点数くれる先生じゃなかったんで。あのときのなめ腐った生意気な私が叩き潰される経験というのはよかったかな。

―本とかで探してくる？

本とか探してくるとかでやって、ネット使ったらすぐにばれて怒られていました。

―やっぱネットはダメなんですね。

今は違うと思いますが、当時はちゃんと全部、本を読んで考えて、みたいな感じで。それこそ国立国会図書館関西館に行って絶版の本とかを借りて読んでいたんですけど。

―労力やばそうですね。

労力やばかったけど、その先生の授業だけは面白かったかな。絶対に人を選ぶというか。基本的にはみんな嫌なんだろうなって。ただ、そんな経験が社会に出てからも、A Iが登場してからも、一次情報は何だろうと考えるくせに繋がっているのかもしれないです。

―高校時代で何かやり残したことみたいなのはありますか？

やり残したこと……青春のせの字もなかったから。それぐらいかな。普通の人ぐらいいは、青春とか楽しんでた方が良かったんちゃうかなって思っている。その当時はその当時にしかないものがあつたにも関わらず、何も思わずに毎日を通りかかっていたことはもったいなかったかなっていう。かといって、もったいないからってそれをやって、自分が今の自分なのかという確証はない。後悔ではないけど、もったいない精神が。

―文化祭の時は中庭ステージありました？

あつたけど、俺は一切関わっていない。文化祭での生徒会活動は高校三年が市民ホールで、一年二年はホームページ担当でした。というのも、自

分で言い張ってホームページを動かすだけでずっとクーラーの効いた部屋でいいよっていう魂胆だからね(笑)。

―準備期間もずっとホームページ？

ずっとホームページ。やっぱり自分自身を表すのは「省エネ」ですから。

\*

未来への転換点となった、天城会議

―ヤング天城会議というのに参加したと拝見したのですが、これはどういうきっかけですか？

当時の担任の倉本先生が、「今年うちの番やから」という謎の番を持ってきて、「誰か一人選ばなあかん」と、「大体技術わかってる人間って、多分学校の中で今とこ都合つけやすいのがお前ぐらいやからお前行ってこい」って言われて、「はい」って言って(笑)。

―自ら行きたいってわけではなく？

先生が「行ってみたら面白い」と言って、行ってきた。

―そうなんですね。これはどういうイベントですか？

一応全国の各ブロックから、二人ぐらい集められてきて、天城っていう伊東にある施設に行って、これからの二十年後の社会どうなるみたいなのをいろいろディスカッションしました。何か未来のリーダーを育てようみたいなのに参加していろいろ勉強したなという合宿です。ちょうどね、この前行ってきたんだよ。(写真を見せながら)天城ってこういうところ。山の中で、これが全体像。

―めっちゃ自然が……。

ここに泊まってディスカッションするみたいな。今、私この運営会社にいるんすよ。このアイ・ビー・エムって会社について、天城の運営してる会社で働いてて。ある意味これが一つのきっかけかな。今の会社にいる。

―じゃあ、この天城に参加して……。

面白かったのが、その当時関わってくださった方が言っていたことがそのまま今の、ちょうど十年後の未来として全部実現してて驚きました。割と未来を見通すような力とかそういうイメージっていう点において、アイ・ビー・エムはすごいものを持っているなというのを感じて、それだったら私も所属してみようかなと思って入ったかな。

―どういうディスカッションをしたとか覚えてますか？

一番はやっぱAIがどう社会に入ってくるかみたいな話。当時はAIなんてあんまり日常的な話だと思わないじゃないすか。多分二〇一五年とか十年前ですよ。だからそういう話をして何かAIがどう変わるとか、社会構造がこれから人が減ってきてどう変わるとか、割と本当にそういう話をしながら、十年後、自分たちがどうなっているかを考えましようみたいな話でした。

―めっちゃくちや今に繋がるようなものですね。

\*

点と点が繋がり、未来を描く

―休みの日とかはプログラミングしていたみたいですけど、それは開発ですか？

開発。なんか適当なWebプログラミングが多かったかな。そう、WebのフロントエンドとPHP、Ruby on Rails、Perlとかメインで書いていました。

―もう独学ってことですね？

独学すね。

―ネットとか本？

当時は本かな。ネットは使ってたけども。

\*

そして今では、立命館の客員研究員になりましたし。

―そうなんですか。

そうそう、立命館の客員研究員と今の会社の仕事、一緒にやっているで。

―すごいですね。客員研究員というのはどういう？

いわゆる研究者として雇われてるわけじゃないですけども、大学の組織に所属して、何か一つを研究してくださいみたいに言われる。

―こういうことやってるか教えてもらえますか？

それこそ何かこの前立守で取材があつた育てるAIっていう。

―あつ。それやりました。

ありがとうございます。何かあれの関係の裏側の理論構築とか。AIと教育をどうつなげるか、みたいなことを今メインでやっています。

―お仕事と研究は、両立できるんすか？

両立できるというかする(笑)。

―ああ。する(笑)。

だから、基本土日は研究なんすよ。土日と仕事終わりは。だから今日も滋賀に来ているのも研究のために帰ってきているんでね。

―でも休まないっすよね。

もう研究が休み・趣味みたいなものになりつつあります。その点で言えば、割とワーカホリックな感じです。高校の時とは大違いですね。あと、

滋賀大学の博士課程も行ってるんで、実はまだ学生です。私。

―博士課程は院つてことですか？

大学院にいます。まだ学生証持つてるんで見せましょうか。(学生証を見せてもらう)

―ほんとだ。じゃあ、博士課程しながら、仕事いきながら、研究員つてことですか？

そうそう。

―その大学院の研究的なのは、お休みの日に？

それも休み、休みの日と仕事終わり。

―めっちゃめっちゃハードじゃないですか。

でも、もうそろそろ大学、そろそろつていうかあと二年あるけど大学院を修了したら、ちよつとゆつくりするから、暇ができるからどうしようと思つて。修了に向けて起業をするような準備をしようか考えています。

―起業はどういうことするか決まってるんですか？

なんか適当にAIスタートアップを立ち上げて、AI作つて売つて数千

万ぐらい稼げたらいいかな(笑) そんなにうまくいかないかね。

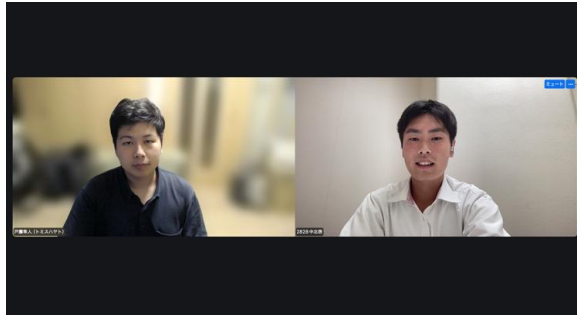
―いいっすね。やっぱAIですよ。

いや、そうでもないよ。今は違うんすよ。AIがこんだけ普通になつてきてるから、逆になんか人がどれだけ重要になるかみたいな時代になつてきます。

―今だからこそ人なんすね。

だからAIサービストン言いがた、どれだけ人がそれをやるかみたいなところで注力してる方が、これからは絶対にニーズが出てきます。だからちよつとそこら辺を狙つてみるのが楽しいかもしれないですね。なので今どういうふうな戦略立てて勝ちに行こうかというのを超悩んでいますね。

―なるほど。貴重なお時間いただき、ありがとうございました。



右：聞き手 中北 啓  
左：語り手 戸簾隼人さん

### 【感想】

一見すると「省エネ」という消極的な動機が、物事の本質を見抜き最短で結果を出すという合理的な強さに昇華されている点に深く感銘を受けました。大学院、客員研究員、仕事と三足のわらじを履きこなす姿は、生徒会活動やヤング天城会議といった高校時代の全ての経験が繋がっているからこそなのだと圧倒されました。さらには、大学院修了後の次のステージも見据えておられ、今回の聞き書きで強い刺激を受けました。ありがとうございました。